

<「知るっば!久留米」 令和3年3月18日(木) 12:30~放送分>

高島野十郎 ～第3回～ 「高島野十郎の壮年期」

<ゲスト：久留米市美術館 学芸員 中山景子さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今月は、『高島野十郎』をテーマに彼の生涯とその作品についてお送りしていきます。

ゲストはこのかたです。

ゲスト:中山景子さん(以下「中山」)

久留米市美術館で学芸員をしております中山です。

よろしくお願いします。

坂本 第3回目の本日は、『高島野十郎の壮年期』をテーマにお話をうかがいたいと思います。

高島野十郎は、いよいよヨーロッパに渡るんですね？

中山 野十郎は、昭和5(1930)年、40歳になる直前にヨーロッパへ渡りました。

30代は独学で絵をひたすら描き、自分の個展を開くまでになっていましたが、

40代を前に、油彩画の本場ヨーロッパへ行って、自分の実力を試してみたい、

画家としての見聞を広げたい、と思ったのでしょう。

約3年をかけて、パリを拠点にスコットランド、ベルギー、オランダ、イタリアなど各地を回りました。

坂本 画家の方は、よくヨーロッパに行かれますよね。

普通は、若いころに留学ということで絵の勉強をしに行かれるという人が多いと思います。

しかし、野十郎は40歳くらいで、それなりの年齢を重ねてからヨーロッパに行かれたんですね。

ヨーロッパで、どう過ごしていたのでしょうか？

中山 当時のパリは、世界中から芸術家が集まっておりまして、文化の中心地とも言える場所でした。

なので野十郎と歳の近い日本人画家も、多数留学していました。

しかし、野十郎は、パリに集った画家たちと交流はせず、ひとりで教会や美術館に通って、

古い時代の絵画を見たり、気に入った風景を写生したりして過ごしたようです。

坂本 ヨーロッパでも、日本のときと同じように、人と群れず、孤独に過ごしていたんですね。

この時期は、どんな作品を描いていたのでしょうか？

中山 もともと、野十郎は人物が主役となった絵をほとんど描いていないのですが、ヨーロッパでも、例えば「西洋婦人像」などといった西洋人をモデルにした人物画は描きませんでした。

それよりも、崩れかけた白壁のある街裏の風景や、緑が広がる田舎の田園風景、落ち葉が散る林などを描いています。

坂本 パリにはもっと華やかな場所がたくさんありそうですが、わざわざ人気（ひとけ）のなさそうな、地味な、落ち着いた風景を描いていたのですね。

中山 そうした場所を好むことが、野十郎らしいと思います。描く対象は常に自然が中心で、人工的なもの、騒がしいものは嫌っていました。ヨーロッパ時代の作品は、それまでの暗くねっとりした色づかいの作品と比べて、全体の色がぐんと明るくなり、タッチも軽やかに、のびのびしたものに変化しています。その理由には、日本とヨーロッパの風土の違いや、野十郎の外国での開放的な気分が反映されたこともあったと思います。

坂本 青年期には、全体的に暗い色彩で目力のある自画像などを描いていた野十郎にとって、ヨーロッパに行ったことは、色々な刺激を受けて、画家としてプラスの経験になったのでしょうか。その後の活動は、どうされたのですか？

中山 野十郎は帰国後、福岡の生家に戻り、自宅の庭に小さなアトリエを建て、そこで精力的に制作していきます。近年発見された「からすうり」という作品も、この時期に描かれました。ヨーロッパに行ったことで、自分の制作の方向性を再確認することができ、制作意欲もさらに高まっていたのでしょう。画面の隅々まで克明に描写する野十郎の作品の中でも、特に完成度の高い絵です。

坂本 ヨーロッパから帰国後に描いた「からすうり」が、近年発見されたんですね。ぜひ、それは見てみたいですね。からすうりと言え、今でも久留米の山の方では、秋の山道で樹木に蔦（つた）を絡ませて、赤い実をつけているのを目にしますよね。色は綺麗ですけど、なかなかモチーフとしては地味なんですけど、この「からすうり」は非常に印象が深く、彼の代表作のひとつとして、以前は図録の表紙にもなっていましたよね。

中山 からすうりは、普段は特に注目されることもない身近な植物ですが、野十郎が描くからすうりには、特別な存在感があります。また、これまで代表作と言われていたもうひとつの「からすうり」の絵があるのですが、それは戦後の作品で、近年発見された「からすうり」は、より早い時期、戦前の作品です。

この2つの「からすうり」の絵は、ぜひ展覧会の会場で見比べていただきたいと思います。

坂本 私がよく知っている「からすうり」は、戦後の作品の方なんですね。

それは、ぜひ見比べてみたいと思います。

帰国後、高島野十郎はどのような人生を歩んでいくのですか？

中山 帰国後、久留米で数年を過ごしたのち、昭和11(1936)年の46歳の頃に再び上京します。

ここからはじまる東京時代が、制作が最も充実した時期で、

2年ごとに個展を開いて、制作した作品を積極的に発表することもしています。

坂本 ヨーロッパでの体験を経て、40代後半から、野十郎の絵のスタイルが徐々に完成していくのですね。

今回は、そこから晩年までの野十郎についてお話をうかがいます。

久留米市美術館の中山さん、今日も興味深いお話をありがとうございました。

久留米市美術館では、生誕130年を記念して「高島野十郎展」を4月4日まで開催しています。

今回は、『高島野十郎の晩年』についてお話をうかがっていきます。

おたのしみに。